

Musikwissenschaftliches Institut と Hochschule für Musik について

—ザールブリッケンの場合—

馬 渕 卯 三 郎

筆者が、音楽学の勉強のために滞在していることを知ると、また、近頃の日本では音楽の勉強が盛んなことを知ると、50年輩の人は口を揃えて、「私共の若い頃は誰でもピアノぐらいは習っていたものだが……」と残念そうに云う、しかし、多くの人にとって今なお「音楽学」は「音楽」とどう違うものやら余り見当のついていない、そんなドイツであるが、この国の音楽学が世界で第一の水準を誇っているのも否定できない事実である。

すべての大学に必らず「音楽学」が専攻分野として設置されているのは、ドイツ及びその他のドイツ語諸国だけであろうし、U.S.A. に住む著名な音楽学者の殆どすべてが、ドイツの大学で音楽学を専攻した人たちであることも事実。いつかのゼミナールで、たまたま諸外国の音楽学者が問題になった時、わずかにスペインのアンゲレスやイギリスのピッケンなどが挙げられたにすぎない。彼等の音楽と音楽への自負の強固さは筆者を憂鬱にさせるに十分であったが、音楽学というものについてそれまで抱いていた概念を放棄させるようなものでもあった。ドイツ人にとって、音楽とはドイツ音楽のことで、(そのドイツ音楽が、たまたま抽象された、普遍性をもった「音楽」と一致することがあっても、決してその一部分というのでなく、)したがって音楽学はゲルマニスティックの一分野乃至下級概念であるかのような観を呈する。

* * *

キールで1学期、ザールブリッケンで4学期。したがって、2つの大学を知っていることになるが、常にピオラWalter Wiora教授のもとに居たので、つまり一同の主任教授のもとに居たので、ドイツの大学における音楽学とその研究室についてはたゞ一つの例しか知らない。

大体、キールとザールブリッケンはいわば対角線的に東北と南西の国境に位置していて、一方はフィヨルドに面し、他は内陸奥深くにあるという点を除けば、2つの町はむしろ似た点を持っている。いずれも小さな州の首都で、人口僅かな田舎町であり、大学とオペラ劇場がある。(キールの大学は1665年に設立されているが、ザールブリッケンのそれは、1957年から58年にかけてである。またザールブリッケンには音楽のHochschuleと放送局を持っていて、音楽的にはキールより数等上であった。)

Musikwissenschaftliches Institut と Hochschule für Musik について

筆者の見聞したことは、だから、どこまでも、ドイツ全体を推測する手がかりとすべきものでない。以下に記すところもまた、あくまでも、ドイツの大学における音楽学研究室すべてにあてはまることではない。

* * *

2つの大学の音楽学研究室は新旧の差はあったが、部屋の構成などは大体同じであった。講義室（演習にも用いる）1、ステージのついた講堂（オーケストラ練習用）1、図書室、その他、教授・講師の個室、助手や秘書の事務室、楽器庫、学生助手の個室などである。図書室の運営方法は、研究室の死命を制する。キールでは、図書室の鍵は5マルクのかたを入れると音楽学に登録した学生全員に貸与される。したがって、早朝から夜10時頃まで、また休暇中も利用可能であり、そのための職員を配置せねばならぬということもない。この点、ザールブリッケンでは、鍵を与えず、職員が、図書室の開閉に責任を持つというやり方で非常に不便であった。図書室運営法として、全くの下策である。

筆者がキールに居た当時、ビオラ教授のもとに教授として、オペラ研究で知られているA.A.Abertとルネサンス・バロックのドイツ音楽を専門とするK. Gudewill、講師 LektorとしてW. Pfannkuch、助手としてL. Finscher（Musikforschungの編集者）やW. Braun（現在講師）、K. Dahlhaus（現在ザールブリッケンの講師）秘書1名という人員構成であった。これに対してJ. Müller-Blattauの後任としてビオラがザールブリッケンへ招かれた時、その下には助教授 Außerplanmäßiger ProfessorとしてW. Salmen、講師 Privat DozentとしてApfel他に助手1名、秘書1名という構成であった。ところでビオラの転任にともなって次のような移動が生じた。まずフィンシャーがキールからザールブリッケンへ助手として招かれ、そのためMusikforschungの編集室もザールブリッケンへ移された。数名の学生もキールからザールブリッケンへ転学した。ビオラの後任としてザルメンがザールブリッケンからキールへ主任教授として招かれた。ついで、ダールハウスがザールブリッケンへ講師 Privat Dozentとして招かれた。

このような移動は、学派形成への意志と恐らく無関係でない。もともと主任教授は、その研究室のすべてについて、全権と責任とをもっているから、この程度のことは珍らしくない。主任教授の権限がとびぬけて大きく、また、雑務で忙しいのは主任教授と助手である、という点など、日本の大学でも普通見られることであるが、日本ではあまり見られない現象として、たとえば上記の場合、ザルメン教授が主任として赴いたキールの研究室では、彼よりはるかに年長の2人の教授が、いわば彼の下に立たなければならぬということと、このように、他の大学から招聘された場合、これを受けてもことわっても昇給する、ということであろう。

なお、ここに単に教授と訳したのはWissenschaftliche Räte und Professorenと呼ばれているものである。Außerordentlicher Professorは主任教授Ordentlicher Professorの次に位するが、現在この地位は殆どなくなりつつあるようで、そのためかどうか、大きな研究室では2名以上の主任教授を持つこと

も珍らしくない。

キールでもザールブリッケンでも、音楽学を専攻する、つまりドクター論文を提出する意志のある学生は数名程度であるが、講義や演習の出席者はもっと多い。「モーツァルトを講義のテーマにすると学生がつめかけると、一般学生の水準の低さをザルメンが嘆いたことがあるが、たしかに、キールで最も多くの学生を集めたのはアーベルト女史の「モーツァルトのオペラ」だった。それにしても聴講者は40名にもならなかったと思う。キールでは、助手3名も出席する演習できへ、10名前後であった。

ザールブリッケンでは、音楽のホーホシューレの学生も、音楽学の講義、演習は大学で取ることになっているので、講義には70名程、演習も30名近くの出席者も珍しくなかった。

* * *

研究室の生活で最も印象にのこるのは、やはりゼミである。研究成果の発表の場である、講義とちがって、ゼミは教育の場である。そこでこそ、ドイツの学問はどんなものか、学者はどんなものかが教えられる。正直なところ、学生が、与えられたテーマで書いてきた報告を早口で読み上げるのを十分理解できたとは云えないが、この報告をもとに議論が始まると、ゼミの本領が発揮される。大体ビオラは、学生が一言いえば、十言やり返すといった風の議論のすきな人で、しかも発想が文献学的・正統派的でないので、教えられるところが多かった。ゼミでは、教授の思想が議論の中で、また座談として何度もくりかえして説明されるので、より印象にのこるということもあるが、またこの場では、学生の反応などもうかがえるので、興味のあることが多い。たとえば、19c. の芸術音楽の中の、バラードと題されるもの（声乐・器楽曲とも）から、筆者にはすでに忘れられていると思われていた、古いアルマンダのふんいきを連想することが、若い学生にも今なお可能であるらしいこと、ホルンのひびきは、単に狩りをでなく、原始の狩獵時代の森の神秘をなお感じさせるらしいことなどを気づかされた。もしドイツ人がドイツ音楽を、そのように過去への追憶の中で聞いているならば、そしてそれをドイツ音楽の理解であるとしているならば、それへのアプローチは、異民族には可能でない。

たしかに、筆者の滞在中のキールとザールブリッケンでは、ドイツ語民族の音楽以外をテーマとした講義も演習も（比較乃至民族音楽学の分野をのぞくと）全く行なわれなかった。同じ条件で、たとえば1966年夏学期のドイツ語諸国の大学で行なわれた非常に多くの講義や演習・実習（350をこえる）のうち、ドイツ語国以外におけるバロック及びそれ以後の芸術音楽をテーマとするものはその5パーセント程度である。筆者の乏しい経験をあえて述べるならば、キールで聞いた「19世紀のシンフォニーの歴史」では、ドイツ・オーストリー以外の音楽家については、ベルリオーズが簡単にふれられたに過ぎない。

留学当初にうけた印象、つまり、ドイツの音楽学は本来ゲルマニスティックの一分野であ

り、研究方法のというよりは、研究対象の特殊さのために、独立の専攻部門になったに過ぎないという印象は、結局、最後まで大して修正されないまゝになった。19c. 後半で、音楽学が学問として認められ、大学にとり上げられたのは、主としてその文献学的叢績によってであり、古い伝統をもつ *Universitäts-Musikdirektor* の制度とは全く無関係であったことも、ドイツの音楽学を、イギリスやフランスのそれと区別して、性格づけるものであろう。

横道に逸れたが、演習についてもう少し述べたい。

ザールブリッケンでは音楽学校（ホーホシューレであるが、後に述べるように、これは日本の音楽大学と決して同じではない。）の学生も音楽学の講義や演習に出席する。これは主として教育音楽コースの学生であるが、中にはマイスター・クラッセの学生も居て、コンクールやリサイタルがあっても、そのために演習を休むわけでなく、入賞してきた直後に研究報告をやった例もある。しかしザールブリッケンでは、これらの学生のために演習も30名近くの多人数になり、またピオラのもとでドクター論文を書くのでもないから、演習の運営は必ずしも容易ではなかったようで、時にはピオラに抵抗的議論をするものも出てくる。このいわば制御しにくいメンバーをまとめ、演習の水準を落さないようにし、学生に報告を準備させるのが助手の務めである。ピオラの演習には助教授以下研究室の全員が参加し、報告も引きうけなければならないが、学生の報告の指導は助手の責任であった。

助手は勿論ドクターであるが、教授資格論文 *Habilitationsschrift* をまだ書いていない。この点、前出の *Lektor* も同じである。これに対して、同じく講師と訳されている *Privat Dozent* はすでに *Habilitation* の審査にパスし *Venia Legendi* つまり「講義する権利」を与えられているもので、したがって、*Lektor* と *Privat Dozent* の間には本質的な差異がある。

* * *

コレギウム・ムジクムのような実技の実習は、予想した程ではなかった。ザールブリッケンでは近世初期以来のドイツの大学の伝統にしたがって、実技の実習や大学オーケストラなどは、大学本部に直属する大学音楽指揮者の指導下におかれ、制度的には、音楽学研究室と切り離されていた。オーケストラは全学的なもので、だからアマチュアオーケストラであり、音楽学専攻の学生でこれに参加しているのは意外に少数であった。

恐らくそれと無関係であろうが、ピオラ教授はコレギウム・ムジクムなどの実習を必ずしも高く評価していなかったようである。勿論、ピオラは、音楽学校に学んだこともある人で、お宅に伺うと、フルートの楽譜が譜面台にひろげられていることもあったし、キールでは一度もひいたことのないピアノを、ザールブリッケンでは、講義や演習でよくひいて聞かせた。そして、音楽学校の学生の大勢聴講しているザールブリッケンでは、ピアノの一つも、やはりひいて見せねばならぬものか、と下司な推量をしたものである。

* * *

ザールブリッケン大学は、歴史が浅いためか、かえって古い大学の習慣を保存しようと努めているのではないかと思われた。たとえば *Verteidigung* という公開の論文試問があった。

ドクター論文（つまり卒業論文）を提出した学生が、学部長、主任教授、指導教授などの試験官の前で、30分程度論文の要旨を述べ、それについて試問される。公開であるから、土地の新聞でも公告されるし、誰でも出席して質問できる。音楽学では一般からの質問はなかったが、そして、一旦退席した試験官の協議の結果直ちに、論文がパスしたと告げられるのが常であったが、他の専門、特に歴史や哲学、ゲルマニスティックなどでは必ずしも無事に論文が通過するわけではなく、*Verteidigung* に失敗したという例を聞いたことがある。言語学の Max Mangold 教授が、音楽学は少し特殊だから、専門外の教授は質問を控えるので、無事合格するのであろうと、筆者に皮肉な説明をしたことがある。

筆者の滞在中に、音楽学で *Habilitation*（教授資格、機能的にはほぼ博士論文にあたる）の *Verteidigung* が一度行なわれた。これはビオラの前任者の長男、大学音楽指揮者の Wendelin Müller-Blattau のそれであった。この場合は、学部長と指導教授であるビオラの他に、立会い試問官として、ケルンから Fellerer、マインツから Federhofer が招かれた。

Verteidigung には、試問官は、教授の正装で登場する。だから、ふだんのように机をたたくて教授を迎えるのではなく、帽子とガウンに敬意を表して、起立しなければならない。そこで用いられる言葉も一定していて、およそものものしい儀式であった。

* * *

ザールブリッケンには *Staatliche Hochschule für Musik* がある。理科系のホーホシューレは大い大学と同じ扱いを受け、ドクター論文を提出できるが、音楽のホーホシューレは、勿論学位などとは関係はない。これは機能的には日本の音楽大学にあたるが、制度的に、またその内容からみても決して音楽大学ではない。

以下に記すことや末尾に附記するカリキュラムなどから、かつての日本の音楽学校が、音楽のホーホシューレの制度を殆どそのまま持ってきたものであることが明らかになる。

旧制専門学校を新制大学と等しいとするならば、*Hochschule für Musik* はたしかに音楽大学である。事実、バチェラーという称号は我が国では、いくつかの専門学校が与えていたものであるから。

音楽学校は新校舎をザール河畔、市立劇場に隣りして建築中であるが、筆者の滞在中はまだ個人の邸宅を少し改造したような建物にあった。さすがに堅型ピアノは、この建物の中には見かけなかった。メシアンやギーゼキング、フォルデシュなどが、かつて教授をしていたことは知られているが、現在マイスタークラスの教授で著名なのはエッシュバッハーと、グライン

ドル, ジャンドロンぐらいであろう。

数回レッスンに立ちあった時の印象では, 教えようとするのは, いうまでもなく音楽とそれを表現する技術であるが, それを主として言葉でやろうとする。こゝでもまた, かねがねピオラの演習で感じていたことを再び感じた。また, 教師と学生の間の議論は, レッソンの場でも往々起るらしい。音楽教育でもまたロゴスはアルファにしてオメガであったのだ。

* * *

ザールブリッケン音楽学校には次のような専攻がおかれている。

1. マイスター・クラッセ
2. 教育音楽 (Schulmusik)
- 3a. カトリック教会音楽
- 3b. 新教教会音楽
4. 音楽教師 (Privatmusikerzieher)
5. 声楽及びオペラ
6. オーケストラ
7. 演奏実技 (Ausbildungsklassen)
8. 演劇

マイスター・クラッセは, 2~7のどれかを終了することが条件になっている。入学資格として大学入学資格 (高等学校卒業) が必要なのは, 各専攻のうち教育音楽のコースつまり師範科のみでこれが, 制度的には我が国の音楽大学にもっとも近い。また学校内での格ずけも高い。高校教員の試験を受けるためには8学期 (4年間) を必要とする。

声楽・オペラ専攻の場合, オペラの下稽古Korrepetitionや, 演劇, 発音などのために多くの時間がとられ更にリズム教育やフェンシングなど, 他のものに比べて演劇コースに近づいている。ある学生が, 筆者から, 日本の音楽大学には演劇科が置かれていないことを聞いて非常に不思議そうな顔をしたことがある。オペラのための訓練を受ける機会のない声楽科が何故存在理由をもつのか不可解なのである。

Ansbildungsklassenはピアノ, チェンバロ, バイオリンとビオラ, チェロ, 作曲Tonsatz, 指揮, 音楽理論の各専門にわかれる。8学期の課程をもつこのコースが, 我が国の音楽大学の実技専攻の実体にもっとも近い。

入試課目は, たとえばピアノを専門とする場合「スケールとアルペッジョ, エチュード1曲, 前古典・古典・近代以後より中程度の曲各1, 視奏」, 作曲を専門とする場合は, 「聴音 Gutes Gehör, 楽典の抱括的知識, 楽式・音楽史の知識, 作品呈示, 十分なピアノ演奏能力, 音楽作品についての抱括的な知識」といった具合である。

* * *

音楽学校以前の音楽教育のためには、いわゆるコンセルバトリーウムがある。これは小さな、人口数万程度の町にもあり、大都市には可成著名なものもあるらしいが、ザールブリッケンの場合、市の補助を受けている小さな町の音楽教室がある。5才からの基礎教育（音感訓練や合奏）、8才からの器楽教育、成人用の器楽・声楽のレッスンや理論の講座など。

こゝにきめられている年齢制限は日本の常識からいうと大変高い。ザルメン教授の令息が5才でピアノを習いに行った時、こんな小さい子供を教えるのは始めてだと云われたそうである。ところで、いろいろの場合の経験から云えることだが、こんな規則は必ずしも尺子定規に守られているのでなく、希望するものがあれば簡単に特例がみとめられるものであることはたしかである。

≫附記<

音楽学校の教科目の一部を参考までに引用しておく。内容の具体的なことを知らないで、誤まりをさけるために、すべてドイツ語のままとした。括弧内のEは個人レッスンを意味する。教育音楽以外の各コースには *Allgemeinbildung* が加えられているが、これらの専攻は大い、中学卒業を入学資格とするから、そのための一般教育科目であると思われる。なお、いわゆるソルフェージュが全く設けられていないが、*Gehörbildung* に含まれているのかも知れない。

教育音楽 *Schulmusik* のコース

	週時数×学期数	
A) <i>Künstlerischer Bereich</i>		
Singen (E)	1	8
Sprechen	1	2
Hauptinstrument (E)	1	8
Klavier als Nebenfach (E)	1	8
Dirigieren	1	8
Chor bzw. Orchester	2	8
Kurs in Violin-Spiel	1	1
B) <i>Pädagogischer Bereich</i>		
Musikerziehung	1	3
Methodik	1	2
Lehrversuche (E)	1	5
C) <i>Musikwissenschaftlich-theoretischer Bereich</i>		
Musikwissenschaftliche Übungen und Vorlesungen	3	8
Gehörbildung	1	8
Tonsatz	2	4
	1	4
Improvisation	1	4
Partiturspiel	1	4
Instrumentenkunde	1	1

Musikwissenschaftliches Institut と Hochschule für Musik について

	週時数×学期数	
Akustik	1	1
哲学		
講義	2	2
演習	2	2
教育学		
講義	1	2
演習	1	2

上記のうち、音楽学、哲学、教育学の講義・演習は大学で開かれているものの中から選択して聴講する。

Privatmusikerzieherのコース (6 学期)

	週時数×学期数	
Hauptfach (E)	1	6
Unterrichtsprobe (E)	2	2
Musikpädagogik	1	1
Psychologie	1	1
Methodik	2	2
Gehörbildung	1	1
Tonsatz	2	2
Volksliedspiel	1	6
Formenlehre	1	2
Musikgeschichte	2	6
Instrumentenkunde	1	1
Akustik	1	1
Klavier oder Nebeninstrument (E)	1	6
Chor oder Orchester	3	6
Vomblattspiel	1	4
Kammermusik	2	4
Allgemeinbildung	2	6

Gesangsklassen und Operschuleのコース (8 学期)

	週時数×学期数	
Hauptfach (E)	2	8
Klavier (E)	½	8
Chor	2	8
Korrepetition (E)	2	8
Dramaturgischer Unterricht	3	8
Atem- u. Sprecherziehung	2	6
Gehörbildung	1	8
Musiklehre	1	2
Tonsatz	2	6
Musikgeschichte	2	6
Formenlehre	1	2
Akustik	1	1

Musikwissenschaftliches Institut と Hochschule für Musik について

	週時数×学期数	
Instrumentenkunde	1	1
Rhythmische Erziehung	1	2
Italienisch	1	4
Fechten	1	2
Allgemeinbildung	2	6
Ausbildungsklassen (8 学期)		
	週時数×学期数	
Hauptfach (E)	2	8
Nebenfach (E)	½	8
Chor	2	8
Orchester	3	8
Musikgeschichte	2	8
Formenlehre	1	2
Instrumentenkunde	1	1
Akustik	1	1
Gehörbildung	1	8
Volkliedspiel	1	4
Partiturspiel	1	6
Kammermusik	2	6
Allgemeinbildung	2	6